

2023 すいせん図書

～本の森へ～



西東京市図書館

butano fontebu



図書館のホームページから、
すいせん図書を見ることが出来ます

1・2年生

「おかあさんのいのり」

武鹿悦子 さく 江頭路子 え／岩崎書店

ある日のよあけ、あかちゃんがうまれました。

おかあさんは、おもいます。このあかちゃんがたくましいわものになる日まで、わたくしがもってあげなければと。そして、いのります。大きくなってそのてに「銃」などにぎりませんようにと。おかあさんが子どもの「へいわ」をねがう絵本です。



「ゆうこさんのルーペ」

多屋光孫 文・絵 はがゆうこ 原案 ふじいかつり 監修／合同出版

ゆうこさんは、めがよくみえませぬ。ほんをよむときは、もじをおおきくみせてくれる「ルーペ」をつかっています。はやたくんは、その「ルーペ」がきになって、ゆうこさんにこえをかけてみました。「ぼくは、はやた。それはなんですか？」ほんとうにあったおはなしです。



「「はやく」と「ゆっくり」」

張輝誠 文 許匡匡 絵 一青妙 訳／光村教育図書

パパとママはほくにいつも「はやくはやく」っていうんだ。でも、おじいちゃんとおばあちゃんは、いなかで「ゆっくりゆっくり」くらしてる。「はやく」と「ゆっくり」の間でどうすればいいのかわからなくなった時、ほくは心の中の時計に聞いて、自分のリズムを見つけることにしたよ。ときどきはやく、ときどきゆっくり。



「そのときがくるくる」

すずきみえ 作 くすはら順子 絵／文研出版

みんなは、きれいなたべものないかな。小学1年生のたくまは、なすがきれい。きゅうしょくになすがでる日は、学校にもいきたくない。たのしみにしていたなつ休み、おじいちゃん、おばあちゃんのおうちにいったら、きれいななすのりょうりがたくさんできた。たくまはきれいななすをたべられるようになるのかな？



「おかあちゃんにきんメダル!」

いどきえり さく おしのともこ え／国土社

ほくのおかあちゃんは、みぎてにしょうがいがある。きょうは、いちねんせいになって、はじめてのじゅぎょうさんかんび。きょうしつにはいつてきたおかあちゃんを、みんながじろじろみてた。ほうかご、よしおに「おまえのかあちゃんので、なんでまがってんの」ときかれて、ほくは、うまくこたえられなくてなきそうになった。



「だれもしらない小さな家」

エリナー・クライマー 作 小宮由 訳 佐竹美保 絵／岩波書店

ある町のとありに、ふたつの大きなマンションにはさまれた、小さな家がありました。とてもかわいい家ですが、そこにはだれもすんでいません。ある日、アリスとジェーンは、ゆうきを出して中に入ってみました。すると、いつも家の中をのぞきこんでいるオブライアンさんもやってきました。ときどきわくわくするおはなしです。



「ウィリアムの子ねこ」

マージョリー・フラック 作・絵 まさきるりこ 訳／徳間書店

四さいのウィリアムがスクーターで通りをいったりきたりしていると、小さな子ねこがついてきました。子ねこをつれて家にかえったウィリアムに、お母さんはけいさつしよへいくことをすすめます。ウィリアムがけいさつしよにいくと、まいごのねこのとどけが三人からでていました。子ねこと男の子のかわいいおはなしです。



「だいどころのたね」

大久保茂徳 監修 久保秀一 写真／ひさかたチャイルド

だいどころでみつけた、きんときまめ、ごま、とうもろこし、いちご。これらはみんなたねなんだ。ほんとうかな？つちにまいてたしかめてみよう。みんなめをだして、またたねができるんだ。ほかにもたねはたくさんあるよ。みんなも、だいどころでたねをみつけて、つちにまいてそだててみよう。



3・4年生

「バスが来ましたよ」

由美村嬉々 文 松本春野 絵／アリス館

「バスが来ましたよ。」バス停でバスをまわっていると、今日も女の子が声をかけてくれました。わたしは、病気になって目が見えなくなりましたが、バスで仕事場に通っています。ひとりで通うことがふあんでしたが、同じバス停でおりる小学生の女の子が、わたしがありるまでおてつだいをしてくれるので、あんしんです。女の子が卒業してもおてつだいいりーはつづいていく心あたたまるおはなしです。



「おすしやさんにいらっしやい！ - 生きものが食べものになるまで -」

おかだいですけ 文 遠藤宏 写真／岩崎書店

おすしやさんにやってきた7人のこどもたち。どんな魚があるか見せてもらいます。キンメダイ、アナゴ、イカ。海で生きているところをつりあげられました。こどもたちは魚を持ってびっくり。職人さんの手さばきにもびっくり。

いろいろな魚がおすしになるまでをしょうかいした写真絵本です。



「やまの動物病院」

なかがわちひろ 作・絵／徳間書店

山のふもとの小さな町のはずれ、いちばん山に近いところに、小さな「まちの動物病院」があります。まちの動物病院のまちの先生は、町の動物たちのおいしやさん。大きなとらねこのとらまるとくらしています。先生がいつものようにしんさつを終えてねむりにつくと、とらまるは起き上がり、「やまの動物病院」をひらきます。こんやも、とらまる先生のしんさつがはじまります。



「レッツキャンプ」

いとうみく 作 酒井以 絵／佼成出版社

晴斗は、お母さんと結婚して、一カ月前に父親になったばかりの大介君とふたりで、はじめてキャンプへいくことになります。はりきっている大介君でしたが、テントははれないし、釣りもまったくできません。そんなたよりない大介君のすがたに、不安しか感じない晴斗は、一組の親子とであい、なかよくなります。いろいろな事情があっても、父と子のすてきな関係を教えてくれるお話です。



「チョコレートタッチ」 パトリック・スキン・キャトリング 作 佐藤淑子 訳 伊津野果地 絵／文研出版

ジョンは、とてもいい子です。でもひとつだけこまったことがありました。それはおかしに目がないことで、とくにチョコレートがだいすきでした。ある日、ひろったコインで買ったチョコレートを食べたところ、たいへんなことがおきました。チョコレートがだいすきな男の子のお話です。



「ブックキャットーネコのないしょの仕事!」 ポリー・フェイパー 作 長友恵子 訳 クラウ・ヴリアミー 絵／徳間書店

第二次世界大戦下のロンドンで、黒ネコのモーガンは生まれました。お母さんと妹とくらしていましたが、空襲で二ひきは死んでしまい、モーガンはひとりきりになってしまいました。ある日、モーガンがネズミを追って入りこんだのは出版社のフェイパー社。モーガンはここで「ブックキャット」として住みこみではたらくことになりました。「ブックキャット」ってどんな仕事かな? 実在したネコがモデルのお話です。



「月のかたち-毎日変わり続ける月のようすがわかる」 藤井旭 監修・写真／ほるぷ出版

夜空で目にすることが多い月のこと、みなさんはどれくらい知っていますか? 「どうして毎日形が変わるんだろう」「月が見えるのは夜だけかな」「月の形で呼び方が色々ある」など、考えるとたくさん疑問が浮かびますね。満月から次の満月までの約1カ月間、日々変わっていく不思議な月のようすを、写真と一緒に見てみましょう。



「宇宙食になったサバ缶」 小坂康之 著 別司芳子 著 早川世詩男 装画・挿絵／小学館

2020年11月、野口宇宙飛行士が宇宙から食レポしたのは、なんと「サバ缶」。それは高校生たちが開発したものでした。生徒の一言ではじまった宇宙食「サバ醤油味付け缶詰」の開発。様々な困難に直面しても、「好き」を原動力に探求を続け、夢をかなえた福井県立若狭高校の14年間の軌跡がえがかれています。



5・6年生

「戦争をやめた人たち…1914年のクリスマス休戦…」 鈴木まもる 文・絵／あすなる書房

1914年7月、多くの国をまきこむ戦争がはじまりました。第一次世界大戦です。その年の12月24日の夜、敵側のドイツ軍から「きよしこのよる」がきこえてくると、こちらのイギリス軍でも兵士が歌い始めました。両軍の兵士は手をあげて出ていき、「メリークリスマス」と握手しました。戦争中、ほんとうにあったおはなしです。



「自転車がほしい！」 マリベス・ポルツ 文 ノア・Z. ジョーンズ 絵 尾高薫 訳／光村教育図書

ルーベンはまだすぐたんじょうび。自転車がかほしいけど、ほしいものがかってももらえるほど、ルーベンの家はゆうふくではありません。ある日スーパーに買い物にいくと、青いコートの人がおとした100ドルさつをひろいました。これで自転車がかえる！と思ったルーベンですが、ひろったお金をなくしてしまいます。自分にとって本当に大切なものが何なのか気づかせてくれるおはなしです。



「昨日のぼくのパンツ」 吉野万理子 著／講談社

十二歳の大志は学校でウンコを我慢していたら、便秘になった。だれにも相談できずにいると、入院しているおじいちゃんが一人で排泄できず、なやんでいることを知る。大志はおじいちゃんを励ますため、みんなのトイレのなやみを調べはじめた。ウンコはいやなものではなく、昨日までの体をつくっていたパーツ。トイレのなやみをもつ人によりそい、排泄の大切さを伝えてくれる物語。



「金曜日のヤマアラシ」 蓼内明子 著 中田いくみ 装画／アリス館

わたしのクラスにやってきた転校生、桐林敏。色が黒くて、手足の長いその男子は、言い方がきつくて、話しかけられてもそっけない。いつもイライラ、トゲトゲしていて、まるで長いトゲをもったヤマアラシみたい。うわさではかなり本格的にサッカーをやっていて、プロの選手を目指しているという。そんなヤマアラシがとつぜん、となりの席のわたしに話しかけてきた。これは前へ進んでいくわたしたちの物語。



「カイトとルソンの海」 土屋千鶴 作／小学館

瀬戸内の海で水軍が活躍していた時代、長い航海からもどってきた大船団と一緒に異国の少年ルソンがやってきた。家であずかることになったカイトがとっておきの場所へ彼を案内すると、ルソンはオイオイ声をあげて泣いて何かを言った。初めて聞くその言葉の音にカイトはあふれる悲しみを感じた。ルソンにはここ能島に来るまでに様々な冒険があり、思い出せない大切なことがあったのだ。



「西の果ての白馬」 マイケル・モーパーゴ 作 ないとうふみこ 訳／徳間書店

大昔から妖精や魔法の言い伝えなどがあつた、イギリスのある村で起きた5つの話を集めた短編集です。嵐で海岸に取り残された少女が古い坑道で出会った二人組の話、森で妖精を助けた姉弟のもとにきた白馬の話、アザラシと海へ泳いでいった少年の話、農場を守っていた「小さい人たち」との約束を破った若者の話、動物の体を癒すミス・マーニーの話。最初から順番に読むことをおすすめします。



「起業家フェリックスは12歳」 アンドリュー・ノリス 著 千葉茂樹 訳／あすなる書房

フェリックスがお母さんのパースデープレゼントに送ったのは、友だちモーの手書きのカード。これが口コミで大人気となり、ふたりはカードの販売を始める。やがてこのビジネスは、オンラインサイト担当のネッド、お金の計算をするエリー、税金対策を教えるルーファスおじさんなど、まわりの人もまきこんでどんどん大きくなっていく。12歳の少年が起業する、とても夢のあるお話です。



「ハタハタ - 荒海にかがやく命 -」 高久至 写真・文／あかね書房

秋田県民に愛され、食文化や風物詩や歌など生活に深くつながっている魚、ハタハタ。ふだん水深200～300メートルの冷たい深海にすんでいるハタハタは、産卵のため秋田の冬の荒海にやってきます。遠浅の砂地が広がる秋田の海は、ハタハタのこどもが育つのによい場所です。ハタハタの産卵、色とりどりのほうせきのような卵、ふ化のようす、そしてうまれた稚魚が元気に泳ぐ姿などを鮮やかな写真で紹介しています。

